

# 反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業における 動画教材に対する学生の理解度と文章表現力の関連に関する調査

三 井 規 裕 (高等教育推進センター・研究代表者)

野 瀬 由季子 (ライティングセンター)

福 山 佑 樹 (ライティングセンター)

西 口 啓 太 (ライティングセンター)

時 任 隼 平 (高等教育推進センター)

## 要 旨

本研究では、反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業を設計・実践し、1) 反転授業を導入したライティング授業を受講した学生の授業に対する評価、2) 動画教材によるレポート執筆に必要な知識の理解度、3) 授業で課したライティング課題(500字・800字)に対する教員からのフィードバック回数と、最終課題のライティング(約2000字)の得点の関連、の3点について検討し、学生の文章表現力との関連を明らかにすることを目的とした。アンケート調査の結果、反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業を実践することで、学生は授業内容を事前に動画で予習し、必要となる知識を理解していた。また、動画教材で学んだことを活かして課題に取り組むことで知識や技術が定着していると実感していた。さらに、動画教材を視聴することで学生は論証構造に関する項目を理解していると認識していたものの、最終課題であるレポートの得点との関連は見られなかった。一方、教員から返されるフィードバック回数との関連は見られた。つまり、学生は反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業を受講しやすいと評価しており、動画教材を通じて授業内容を理解していたと考えられる。しかしながら、授業で得た知識を活用するためには、ライティング課題に取り組み、課題に対して教員からの適切なフィードバックを受ける必要があると言える。学生の文章表現力を向上させるためには、書く経験を積み重ね、学生-教師間のインタラクションを促進する必要がある。

## 1. 研究の背景と研究の目的

日本の大学の多くがレポートの書き方に関する授業を実践している。例えば文部科学省(2010, 2021)によると初年次教育の中でレポート・論文の書き方等の文章作法に関する取り組みを行っている大学は、505大学(平成20年度)から678大学(令和元年度)に増加していることが報告されている。この傾向からも、大学における文章表現力の重要性が高まっていることが窺える。

こうした状況の中、初年次教育においては文章表現力を育成するための工夫が試みられてい

る。例えば、ICT (Information and Communication Technology) を活用した授業の実践としては佐渡島ほか (2015) の初年次教育科目「学術的文章の作成」がある。この授業は授業動画、レポート課題と課題に対する大学院生からの毎回のフィードバックを組み合わせたフルオンデマンド形式で実践されている。授業の効果を検討するため、履修した学生と履修していない学生の書いたレポートを分析した結果、履修した学生の方が〈緻密さ〉と〈内容〉の点において優れていたことが明らかにされている。また、館野ほか (2011) は、15名の学生を対象に論証を意識したコメント活動を支援するシステムを用いて授業を実践している。具体的には、学生にレポート課題を書かせた後、論証を意識させるためツールミンモデルについて説明し、システムを活用した協同推敲を行わせている。協同推敲の結果、学生は他の学生のレポートに対し、論証を意識したコメントを書くことができ、システム上で協同推敲を繰り返したことで主張を明確に書くことができるようになるなど、学生のレポートの質に改善のきざしが見られたと述べている。つまり、文章表現に関する授業を受けた学生は、必要な知識を獲得し、活用することができるようになると思われる。

このような実践によって学生の文章表現力の向上が明らかにされていることは一定の価値がある。しかしながら、授業内の学習活動だけでは十分に理解ができないものもある。例えば、田川・徳田 (2018) は論証構造に関する項目の学生の理解度は不明であり、授業内では理解が十分でない可能性を示している。

対面形式の正課授業において授業時間外に知識を獲得し、授業時間内は実習に取り組み知識を定着させる方法として反転授業がある。ここでいう反転授業とは、「学習者が事前学習時に教師による解説と丹念な設計がなされた学習活動に取り組んだのちに、対面授業時に理解の定着や応用・発展を意図した学習活動に取り組む授業形態」(渋川 2021) のことである。反転授業は理工系科目、情報科目、語学、数学、導入教育など様々な科目で導入されており、学習時間の確保や一部の学生が成績向上するなどの成果が報告されている (武田 2016)。このように多くの科目で反転授業が取り入れられる理由としては、事前に動画を視聴し、授業中は事前学習をもとに課題等に取り組むことから授業外学習を促すことができること、わからないことがあれば何度も見ることができることにある (佐藤 2016)。つまり、反転授業は学習した知識の定着や得た知識を活用しながら学習活動を行うことができることから、授業内の学習活動だけでは十分に理解するのが難しいライティングの知識に対して、その習得を支援する上で1つの有用な教育方法になりうる。

事前に得た知識を活用するという教育方法であることから、アカデミック・ライティングの授業でも徐々に反転授業が実践されている。例えば、大学院生を対象にレポートを書く際に必要な技術を身につけるため反転授業を導入し、履修生の書く技術を育成する実践 (岩崎・大橋 2018)、アカデミック・ライティングに関する知識・技能を動画で学習した後、文章作成課題を授業までに提出させ、授業内ではピア・レビューと文章作成課題の修正に取り組ませる実践 (富永・椿本 2017) や学生が授業内だけでは理解しきれない文章構成、引用方法等の一部で反転授業に取り組む実践がある (田川・徳田 2018)。これらの実践の結果、反転授業を導入することで学生からの授業の満足度は高く、学生の成績が向上することが明らかにされている。しかし、反転授業を用いる先行研究 (岩崎・大橋 2018) では、反転授業形式の授業に対する履修生の評価を検討しているものの、対象者は大学院生であることから学部生について検討されていない。また、富永・

椿本（2017）は反転授業を導入することで、事前課題の点数と最終レポートの成績の間に影響が見られたことを示しているものの、教員によるフィードバックとの関連については検討されていない。こうした他者からのフィードバックは、自身の文章を見直す上で重要な役割を果たす（大島 2010）ことから、レポート作成について学ぶ上で重要であると考えられる。これらの点を考慮し、本研究では、1）反転授業を導入したライティング授業を受講した学生の授業に対する評価、2）動画教材によるレポート執筆に必要な知識の理解度、3）授業で課したライティング課題（500字・800字）に対する教員からのフィードバック回数と、最終課題のライティング（約2000字）の得点の関連、の3点について検討し、学生の文章表現力との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の対象と方法

### 2.1 スタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎）の概要

本研究で対象とする実践は、関西学院大学において2021年度秋学期に全学部全学年対象に開講されたスタディスキルセミナー（レポート執筆の基礎、18クラス233名）の授業（1クラス定員20名）である。

授業の目的は、書き手が論証構造を意識して書くことができるようになることである。論証構造を学ぶために、ツールミンモデルを援用して授業は設計されている。ツールミンモデルとは、法学の分野で実際に行われた議論を分析し、考案された議論モデル（ツールミン 2011）のことである。受講生は、この議論モデルを参考にレポートを書くことが求められる。具体的には、根拠に基づく主張を述べ、主張と根拠をつなぐ論拠を示し、主張への反論を想定して条件を示す必要がある。さらに、主張を除く根拠・論拠に文献で得たデータや情報を引用することを受講生に求める。

本研究の対象となる、「2021年度秋学期授業概要」を表1に示す。学生は事前に動画教材を視聴してから授業に出席する。授業では、動画教材に関する課題に取り組んだ後、500字・800字ライティング課題（以下、字数制限課題）と2つのレポート課題に取り組む。字数制限課題やレポート課題についてはピア・レビューを行い、指摘された点について学生自身で検討し、必要であれば修正する。授業時間中、教員は学生からの個別の質問に常に対応する。なお、5名の教員がこの授業を担当し、授業動画や資料等は共通の教材を使用する。

授業は次の通りに実施される。学生は、第2回から8回の授業で、前述したツールミンの議論モデルを参考にした論証構造、アカデミックな文章に必要な表現や引用方法等について約10分の動画1～2本を視聴する。その後、LMS（Learning Management System）上で動画内容に関するワーク実習に取り組む。このワーク実習が終わったら、論証に関する項目等を段階的に習得するため、500字・800字以内で執筆する字数制限課題に取り組む。また、この授業では2回のレポートを作成する必要がある。レポート1は約1000字、レポート2は約2000字を指定の字数とする。課題の字数については、大学入学前までに書いたことのある文章の字数について調査した春日（2021）によると、800字以下がほとんどであったことが明らかにされている。このことから、この授業では、500字から段階的に字数を増やすようにし、課題に取り組みやすくした。

授業時間中、教員は学生の質問に対応する。例えば、自分の意見とデータがどうつながるかの

表1 2021年度レポート執筆基礎の概要

	授業計画	授業外学習
第1回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション：この授業の進め方、評価の仕方</li> <li>・アカデミックな文章とは【講義】</li> <li>・テーマ選択型ライティング【実習】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義動画「アカデミックな文章の全体像」を第2回授業までに視聴。</li> <li>・テーマ選択型ライティングを完成させる（第2回授業までにLMS上に提出）</li> </ul>
第2回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アカデミックな文章の全体像</li> <li>・相互フィードバック【実習】</li> <li>・テーマ選択型ライティング【実習】</li> <li>・レポート（1）概要発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマ選択型ライティングに取り組む。</li> <li>・講義動画「論理的な文章を書く」を第3回授業までに視聴。</li> </ul>
第3回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論理的な文章を書く</li> <li>・論拠の種類【実習】</li> <li>・500字ライティング【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> <li>・レポート（1）テーマ設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義動画「引用の方法と参考文献リストの書き方」を第4回授業までに視聴。</li> <li>・500字ライティングに取り組む。</li> </ul>
第4回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引用の方法と参考文献リストの書き方</li> <li>・引用と参考文献【実習】</li> <li>・500字ライティング【ワーク実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> <li>・レポート（1）概要シートの解説・作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート（1）概要シートを次週までに完成させる。</li> <li>・講義動画「パラグラフで書く」を第5回授業までに視聴。</li> <li>・500字ライティングに取り組む。</li> </ul>
第5回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラグラフで書く</li> <li>・パラグラフ【実習】</li> <li>・レポート（1）概要シートの提出【実習】</li> <li>・500字ライティング【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次週授業終了時までにレポート（1）を提出できるよう、作業を進める。</li> <li>・講義動画「論理の飛躍がない文章を書く」を第6回授業までに視聴。</li> <li>・500字ライティングに取り組む。</li> </ul>
第6回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論理の飛躍がない文章を書く</li> <li>・ロジックの飛躍を指摘する【実習】</li> <li>・500字ライティング完成予定【実習】</li> <li>・レポート（1）相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次週までに500字ライティングで合格をもらう。</li> </ul>
第7回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート（1）完成・提出【実習】</li> <li>・レポート（2）概要発表</li> <li>・レポート（2）概要シートの解説・作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義動画「条件とは何か」を第8回授業までに視聴。</li> </ul>
第8回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・条件とは何か</li> <li>・条件【実習】</li> <li>・800字ライティング【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・800字ライティングに取り組む。</li> <li>・講義動画「主張が先か、根拠が先か：主張のための根拠探しではいけない」を視聴。</li> </ul>
第9回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主張が先か、根拠が先か：主張のための根拠探しではいけない</li> <li>・主張が先か、根拠が先か【実習】</li> <li>・800字ライティング【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・800字ライティングに取り組む。</li> <li>・レポート（2）概要シートを次週までに完成させる。</li> </ul>
第10回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・800字ライティング【実習】</li> <li>・レポート（2）概要シート提出【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・800字ライティングに取り組む。</li> <li>・レポート（2）の執筆に取り組む。</li> </ul>
第11回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学術的な文章の校閲【実習】</li> <li>・800字ライティング【実習】</li> <li>・相互フィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次週までにレポート（2）の初稿を完成させる。</li> </ul>
第12回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・800字ライティング完成予定【実習】</li> <li>・レポート（2）相互フィードバック【実習】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次週までに800字ライティングで合格をもらう。</li> <li>・次週までにレポート（2）の修正稿を完成させる。</li> </ul>
第13回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート（2）相互フィードバック【実習】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次週までにレポート（2）の最終稿を完成させる。</li> </ul>
第14回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート（2）完成・提出【実習】</li> <li>・授業の振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート（2）の提出 *LMS上で提出</li> </ul>

理由（論拠）を説明することができていない場合は、課題を確認しながら、なぜそのように考えたのか聞き、個別指導を行う。また、字数制限課題が授業日から3日以内にLMS上に提出されると、教員は次の授業までにコメントを付して返却する。遅れて提出があった場合は、授業中もしくは授業後に返却する。字数制限課題は教員から合格と認定されるまで繰り返し提出しなければならない。そのため、学生によっては、3回から6回程度修正することが求められる。なお、基本的には教員からのフィードバックが複数回あるのは字数制限課題のみである。この授業で取り組む字数制限課題とレポート1・2のテーマは自由とする。

## 2.2 反転授業用動画の概要

反転授業は事前学習時に教師による解説を適切に行うことが重要とされている（渋川 2021）。本授業では学生が利用しやすく、教員による解説を聞くことができるよう反転授業で多く活用されている動画教材を作成する。2021年度秋学期に作成した動画教材は、過去の授業資料を全体的に見直し、学生が動画を見ることでレポート作成に必要な知識が獲得できるように配慮して作成する。具体的には、論証構造について初めて学ぶ学生が多いことを想定し、論証構造に必要な項目である主張、根拠、論拠、条件、序論・本論・結論、パラグラフで書くについては丁寧な説明や事例を示すようにする（図1・2）。また、引用やレポート執筆のルールについても動画教材で説明する。

### 本論のパラグラフ（段落）

**本論 = 本体 = 具体的な内容**

①段落の主張(※ 要点に近い)

②根拠1

③根拠2

④論拠

⑤結論(①と対応する)

**本論は序論で書いた、目的(=「レポート全体の主張」)と論の展開に即して書く**

①序論で「ここでは、1.○○○○、2.○○○○、3.○○○○の観点から検討する。」と論の展開を書いたならば、3つのパラグラフに分けて書く  
各段落の主張は、「○○○○」と対応するように書く  
②と③根拠は2つから3つ程度を意識。  
④論拠で 根拠からどうして段落の主張を導くことができるのかを書く  
⑤結論は段落の主張と対応

図1 パラグラフに必要な要素の解説スライド

### 序論のパラグラフ（段落）

**【例】本論 = 本体 = 具体的な内容**

段落の主張

第二に、少子高齢化によって、賦課方式を採用している現行の年金制度の維持は、ますます困難になることが予想される。

根拠

牛丸（1996）は賦課方式のデメリットについて「高齢者の割合が増えていく状況下では、後代世代に求める負担額は増加していく」と述べている。また、厚生労働省（2011）の「年金に関する資料」によると、非正規雇用者が増え、現在の公的年金制度は労働環境の変化に対応できていないという。

論拠

つまり、現役世代に対する負担が過重になる事態が起こり、非正規雇用者の増加などから保険料を納付できない者や、制度に加入しない者が出てくるといった問題を招くと考えられる。

結論

よって、少子高齢化による現役世代への負担の増加は、現行の年金制度の存続にも関わる問題であるといえる。

図2 パラグラフで書く場合の事例スライド

動画で使用するスライドは、わかりやすい資料にするため全体的なデザインを統一する。スライドに関しては解説のために文字が増えてしまうという点を考慮し、色、太字等を効果的に使用し、学生が予習に取り組みやすいように工夫する。なお、動画の音声については、関西学院大学放送部の協力を得て、聞き取りやすく理解しやすいよう配慮する。

### 2.3 対象者と調査手順

1) 反転授業を導入したライティング授業を受講した学生の授業に対する評価、2) 動画教材によるレポート執筆に必要な知識の理解度、3) 授業で課したライティング課題 (500字・800字) に対する教員からのフィードバック回数と、最終課題のライティング (約2000字) の得点、の3点について検討し、学生の文章表現力との関連を明らかにするため、2021年度秋学期の受講生233名を調査対象とする。具体的には、14回目に Web 上でアンケート調査を実施し、学生は執筆活動をふりかえるために回答する。アンケートは事前授業動画を視聴して、論証構造の項目及びアカデミックな文章表現を理解できたかに関する項目11問 (5: そう思う~1: そう思わないの5件法)、②反転授業に関する評価 (5: よかった~1: よくなかったの5件法)、③②の回答理由の自由記述への回答を求める。なお、質問項目はライティング教育を専門とする第4著者を中心に著者間で協議を行い決定した。

倫理的配慮の観点からアンケート実施の目的、収集したデータの保管方法、個人を特定できないようデータを加工し、学会等で報告することがあることを学生に説明する。また、アンケートの回答は任意であることを伝え、協力の同意を得るようにする。

### 2.4 分析方法

学生が事前動画内容をどの程度理解し、反転授業を導入したアカデミック・ライティングの授業を評価したかについては、アンケートに回答のあった233名の内、同意を得た165名 (回答率70.8%) を分析対象とする。

分析方法は、まず、反転授業を導入したアカデミック・ライティング科目について学生がどのように評価したかを検討するため14回目のアンケート調査の回答と自由記述を用いて計量テキスト分析手法の1つである共起ネットワーク図を作成する。共起ネットワーク図を作成することで、同じ文書の中で一緒に使われる語の組み合わせを表すことができ、一緒に使われる語のグループを確認することで、文章からトピックを読み取ることができる (樋口ほか 2022)。計量テキスト分析ソフトはKH Coder (樋口 2014) を使用する。次に、論証構造の項目及びアカデミックな文章表現を理解できたかのアンケートの集計結果を確認する (以下、アンケート結果)。さらに、レポート2の得点とアンケート結果に関連があるかを検討するため相関分析を行う。

以下の手順で共起ネットワーク図を作成する。①学生の自由記述 (165名) を Excel に保存する。その際、学生1人ごとの記述を1セルに格納する。②誤字脱字がないかを確認し、明らかな誤字や脱字は修正をする。③準備した Excel ファイルを KH Coder に読み込ませる。④読み込んだデータから共起ネットワーク (最小出現数5、最小文書数1、使用する語の数42、描画する共起関係上位60) を実行する。その後、共起ネットワーク図に付置された語の回答文を KWIC コンコーダンスで検索し、原文を確認しながら共起した語同士にどのようなトピックがあるのかを

確認する。

次に、レポート2の得点と字数制限課題に対する教員からのフィードバック回数に関連があるかを検討するため相関分析を行う。分析対象は、字数制限課題及びレポート2のいずれも提出していない学生11名を除く211名とする。

### 3. 分析結果と考察

#### 3.1 反転授業に対する評価結果

学生は反転授業を用いたアカデミック・ライティング授業を受講しやすいと評価していた。アンケート結果(表2)の「12. 反転授業形式のアカデミック・ライティング授業の評価」は、平均値が4.6 ( $SD=0.68$ )であった。また、学生が反転授業形式のアカデミック・ライティング授業を具体的にどのように評価したかについて共起ネットワーク図(図3)に付置された語を確認した。「授業」「内容」「事前」「理解」、「動画」「見る」「文章」「書く」や「先生」「質問」「課題」「分かる」「時間」等に共起関係が見られた。具体的に記述を確認すると次の通りであった。

**事前**に今日の**授業**では何を学ぶのかを提示されているため、**授業**に目的をもって参加できた点がよかったですと思いました。

**授業動画**である程度、大切な要素を理解したうえで**授業**でさらに要点を絞って説明してくださったので大切なポイントをさらに**理解**することができたため。

**授業**で何をするか分かった上で**授業**を受けた方が、**内容**を吸収しやすかったから。

**事前**に予習し**授業**に臨むことで、**内容**を再度復習しながら**文章**を書くことができるのでよかったと思う。

**事前**に**動画**を見て、**授業**でもう一度確認することで、二度学習できたものに等しく、**動画**を見ずに**授業**に出るよりも学習**内容**が自分自身に定着するから。

表2 論証構造の項目及びアカデミックな文章表現を理解できたかのアンケート結果

	質問項目	平均値	標準偏差
1	事前の動画だけで「主張」を理解できた	4.6	0.53
2	事前の動画だけで「根拠」を理解できた	4.6	0.59
3	事前の動画だけで「論拠」を理解できた	4.3	0.83
4	事前の動画だけで「条件」を理解できた	4.0	0.98
5	事前の動画だけで「引用の書き方」を理解できた	4.5	0.70
6	事前の動画だけで「レポートを書く際に必要な表現」を理解できた	4.4	0.65
7	事前の動画だけで「レポートを書く際に使える情報(源)」を理解できた	4.5	0.63
8	事前の動画だけで「レポートを書く際に使えない情報(源)」を理解できた	4.4	0.71
9	事前の動画だけで「レポートの構成(序論・本論・結論)に書くべき内容とは何か」を理解できた	4.5	0.63
10	事前の動画だけで「ロジックの飛躍がある文章とない文章」を理解できた	4.1	0.83
11	事前の動画だけで「テーマ・主張の修正」について理解できた	4.3	0.74
12	反転授業形式のライティング授業の評価	4.6	0.68

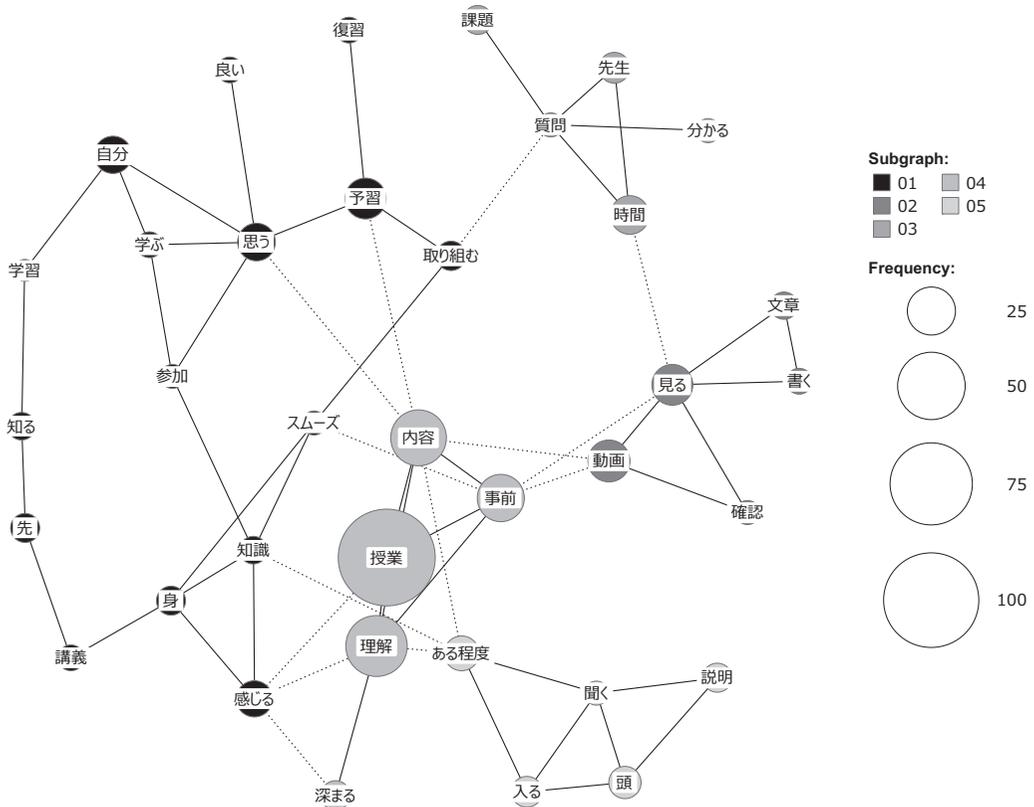


図3 反転授業を導入したアカデミック・ライティング科目の学生の評価に関する共起ネットワーク図

課題を家でするのではなく授業でできたので、効率よく課題を進める事ができた。そして課題をしながら先生にも質問ができたのでよかった。

何を意識して授業に取り組めばいいか分かった。先生に質問する時間が多く確保できた。

先に授業動画を見ておくことで、授業で文章を書いている間にフィードバックを受けられる時間が長くなるから。

つまり、事前に学習した知識を使って繰り返し文章を作成でき、理解できていないところは教員に質問できる等、学んだことが定着するという実感があったことから反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業を好意的に評価していた。反転授業に対する大学院生の評価を検討した岩崎・大橋(2018)においても平均値は4.5であったことから、反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業は学生の学びを促進する可能性があると言える。

### 3.2 動画教材の理解度

学生は事前に試聴する動画だけで授業内容を理解していた。アンケート結果(表2)を見ると最も平均値が高かったのは「1. 事前の動画だけで「主張」を理解できた」と「2. 事前の動画

表3 リポート2の得点とアンケート結果との相関分析結果

	リポート 2の得点	主張の 理解	根拠の 理解	論拠の 理解	条件の 理解	引用の 書き方の 理解	必要な 表現の 理解	使える 情報の 理解	使えない 情報の 理解	序論・本 論・結論 の理解	ロジック の飛躍の 理解	テーマ・ 主張の修 正の理解
リポート2の得点	1	0.07	0.06	0.00	0.01	0.11	0.03	0.00	0.06	0.00	-0.07	-0.08
主張の理解		1	0.90	0.62	0.35	0.54	0.48	0.57	0.42	0.54	0.34	0.33
根拠の理解			1	0.67	0.38	0.52	0.51	0.60	0.44	0.54	0.30	0.33
論拠の理解				1	0.54	0.41	0.50	0.42	0.30	0.51	0.53	0.37
条件の理解					1	0.37	0.40	0.35	0.43	0.40	0.54	0.46
引用の書き方の理解						1	0.56	0.53	0.34	0.61	0.39	0.37
必要な表現の理解							1	0.68	0.45	0.56	0.50	0.55
使える情報の理解								1	0.65	0.48	0.40	0.49
使えない情報の理解									1	0.37	0.28	0.47
序論・本論・結論の理解										1	0.53	0.36
ロジックの飛躍の理解											1	0.52
テーマ・主張の修正の理解												1

灰色は  $p < .01$  を表す

だけで「根拠」を理解できた」であり、平均値は4.6 ( $SD=0.53$ ;  $SD=0.59$ ) であった。最も平均値が低かったのは「4. 事前の動画だけで「条件」を理解できた」であり、平均値が4.0 ( $SD=0.98$ ) であった。5件法での回答であることから、全ての項目で4.0以上であることを考えると学生の理解度は高いと言える。したがって、学生は事前動画で授業内容をある程度理解することができていたと考えられる。

一方、授業動画を通じて授業内容を理解しているものの、実際に執筆したリポート2の得点と学生の理解度には関連が見られなかった(表3)。授業の最終課題であるリポート2の得点(平均値13.1,  $SD=7.16$ )と事前動画の理解度の相関係数は、-0.08から0.11の間であり相関はなかった。この結果から、学生は論証構造に関する知識は獲得したと自己認識していると言えるものの、実際に学生の書いたリポートの得点とは関連が見られないと言える。

### 3.3 リポート2の採点結果と課題に対する教員からのフィードバック回数との関連

最後に、最終課題であるリポート2の得点と字数制限課題に対する教員からのフィードバック回数の関連について検討した。リポート2の得点の平均値は13.1 ( $SD=7.16$ ) であった。500字のフィードバック回数の平均値は3.3 ( $SD=1.45$ )、800字のフィードバック回数の平均値は2.6 ( $SD=1.68$ ) であった。相関分析の結果(表4)、リポート2の得点と500字のフィードバック回数の相関係数は0.04であり、有意差はなかった。一方、リポート2の得点と800字のフィードバック回数の相関係数は0.47であり有意な相関が見られた。つまり、500字の段階では教員からのフィードバックをもらっても、リポートを作成するための観点が十分に理解できていなかったが、授業内での個別指導やリポート1・800字の執筆を経て、リポート2の得点と800字のフィードバック回数には関連が見られたと考えられる。ただし、本研究ではフィードバック回数にのみ着目したことから、今後はフィードバックの際にどのようなコメントをしているかについて検討する必要がある。

表4 リポート2の得点とアンケート結果及びフィードバック回数との相関分析結果

	リポート2の 得点	500字フィード バック回数	800字フィード バック回数
リポート2の得点	1	0.04	0.47
500字フィードバック回数		1	0.38
800字フィードバック回数			1

灰色は  $p < .01$  を表す

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、反転授業を用いたアカデミックライティング授業を設計・実践し、1) 反転授業を導入したライティング授業を受講した学生の授業に対する評価、2) 動画教材によるレポート執筆に必要な知識の理解度、3) 授業で課したライティング課題 (500字・800字) に対する教員からのフィードバック回数と、最終課題のライティング (約2000字) の得点の関連、の3点について検討し、学生の文章表現力との関連を明らかにすることを目的として設定した。

アンケート調査との関連を検討した結果、反転授業を導入したアカデミック・ライティング授業を実践することで、学生は授業内容を事前に動画で予習し、必要となる知識を理解していた。また、動画教材で学んだことを活かして課題に取り組むことで知識や技術が定着していると実感していた。さらに、動画教材を視聴することで学生は論証構造に関する項目を理解していると認識していたものの、最終課題であるリポート2の得点との関連は見られなかった。一方、800字の字数制限課題に対する教員からのフィードバック回数とリポート2の得点との関連は見られた。つまり、動画教材で知識を理解するだけでは文章表現力を向上させることはできないと考えられ、文章表現力を向上させるためには、書く経験を積み重ね、教員から課題に対して適切なフィードバックを受けることが必要であると言える。

最後に今後の課題について述べる。本稿では、教員からの課題に対するフィードバック回数が文章表現力の向上に関連していることを明らかにした。しかしながら、フィードバックにおいて実際に教員がどのようなコメントを学生に返しているかについては十分に検討できていない。今後は、字数制限課題に対する教員のフィードバックの回数だけでなく、教員からのフィードバック内容に着目し、リポート2の得点との関連について検討していく必要がある。

#### 謝辞

本研究は関西学院大学高等教育推進センターの研究助成を受けて実施されたものです。また、調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 文部科学省 (2010) 大学における教育内容等の改革状況について (平成20年度), [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2010/05/26/1294057\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2010/05/26/1294057_1_1.pdf)
- 文部科学省 (2021) 令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要), [https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt\\_daigakuc03-000018152\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf)

- 佐渡島紗織, 宇都伸之, 坂本麻裕子, 大野真澄, 渡寛法 (2015) 初年次アカデミック・ライティング授業の効果: 早稲田大学商学部における調査. 大学教育学会誌 37(2): pp. 154-161.
- 館野泰一, 大浦弘樹, 望月俊男, 西森年寿, 山内祐平, 中原淳 (2011) アカデミック・ライティングを支援する ICT を活用した協同推敲の実践と評価. 日本教育工学会論文誌 34(4): pp. 417-428.
- 田川麻央・徳田恵 (2018) 初年次教育での文章作成における反転授業の導入と効果の検討. 言語文化研究 1号, pp. 51-58.
- 澁川幸加 (2021) ブレンド型授業との比較・従来授業における予習との比較を通じた反転授業の特徴と定義の検討. 日本教育工学会論文誌44巻 4号, pp. 561-574.
- 武田俊之 (2016) 反転授業に関する実践および研究の展望. 関西学院大学高等教育研究 6号, pp. 95-100.
- 佐藤広志 (2016) 大学における反転授業の可能性—学習時間を再設計する方法論として—. 関西国際大学研究紀要第17号, pp. 167-178.
- 岩崎公弥子, 大橋陽 (2018) 反転授業を導入したアカデミック・ライティング学習のデザイン. 研究報告コンピュータと教育2018巻23号, pp. 1-6.
- 富永敦子, 椿本弥生 (2017) 大学生を対象としたライティング反転授業における e ラーニングの効果. 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, p. 227.
- 大島弥生 (2010) 〈実践報告〉大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み: ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向けて. 京都大学高等教育研究16巻, pp. 25-36.
- スティーヴン・トゥールミン (著), 戸田山和久, 福澤一吉 (訳) (2011) 議論の技法. 東京図書, 東京
- 春日美穂 (2021) 高校における文章表現教育はどのように行われているのか—入学生の調査から見てきたこと. 春日美穂, 近藤裕子, 坂尻彰宏, 島田康行, 根来麻子, 堀一成, 由井恭子, 渡辺哲司. あらためて, ライティングの高大接続. ひつじ書房, 東京, pp. 13-27
- 樋口耕一, 中村康則, 周景龍 (2022) 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング—フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析—. ナカニシヤ出版, 京都
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. ナカニシヤ出版, 京都